

『第三回野村胡堂文学賞』授賞式

2015/10/15 記

快晴に恵まれた 10 月 15 日、御遷座 400 年を迎えた神田明神を舞台に第三回「野村胡堂文学賞」授与式が開催された。



授賞式は神田明神会館にて執行



神田明神本殿前にて記念撮影



「銭形平次の碑」前で記念撮影

「野村胡堂文学賞」授与式の開催報告のため、出席者一同神田明神へ参拝。受賞者、授賞式参列者、日本作家クラブの一層の発展を祈念いたしました。参拝後に本殿前と「銭形平次の碑」前にて記念撮影。



会場では鳴神先生の受賞作と最新作「鬼船の城塞」を販売



初代受賞者の小中陽太郎先生、第二回受賞者の塚本青史先生と記念撮影

第三回野村胡堂文学賞は鳴神響一先生の「私が愛したサムライの娘」が受賞。本文学賞は前年度に商業出版された時代小説及び歴史小説より予備選考を実施、会員投票を経て上位三作品を選出、選考委員が受賞作を内定、理事会により正式に決定されます。

鳴神響一先生は今作がデビュー作という新進気鋭の作者ですが、今作は緻密でスケールが大きいストーリーの中に面白さと品格、教養の高さも感じさせるところがあり、今回の受賞となりました。本作品は第6回角川春樹小説賞をすでに獲得しており「他で賞を取っていないが、賞を取ってしかるべき作品に賞を与えたい」という会の趣旨もありますが、そうした事情を超えてなお受賞に値する魅力が感じられる作品として選考されました。



司会は元テレビ朝日アナウンサー・高井正憲氏



中村信也理事長の開会宣言により式典がスタート



塚本青史副理事長による選考経緯の説明

授賞式の司会は元テレビ朝日ニュースキャスターの高井正憲氏、当クラブ中村信也理事長の開会の辞によりスタート。続いて塚本青史副理事長より野村胡堂賞のあらましと選考経緯の説明の後、授与式に入った。

ここでアクシデント発生。賞状の実物が会場に届いておらず、選考委員長の奥本大三郎先生から受賞者の鳴神響一先生へはとりあえず賞状の電子画プリントが手渡された。実物は無くとも電子版にて急場を凌げるところが現代のインターネット文明であろうか。そういったハプニングも笑いに変えてしまうのが当クラブの大きな特長でもあり、現代の最新手段による授与式とユーモアを交えることで一つのエピソードにもなりました。



鳴神響一先生に選考委員長の奥本大三郎先生より表彰状の授与



奥本先生は選考の挨拶とともに原著に親しむ重要性・楽しさを力説



中村理事長より賞金の授与。



吉村会長より副賞の授与

選考委員長の奥本先生から「iPad」による電子書籍の愛用が紹介され、どのような形でも良いから原著に親しむことの重要性を話されるなど、時代や形に囚われず実を重視する当クラブの精神性が伝えられた。



受賞の喜びと支援者の方々に感謝を述べられる鳴神先生



野村胡堂のお孫さんである住川碧先生より御祝辞を頂戴する



角川春樹先生は御祝辞で鳴神先生執筆本の高い評価と期待を述べられる

鳴神先生は受賞作品がデビュー作であり、受賞の御挨拶では緊張の面持ちで、これまでお世話になった方々への感謝を述べられた。感激と緊張のあまり言葉に詰まられる場面もありましたが、会場には和みとユーモア感が漂いました。



友人であるNHKチーフプロデューサーの吉川邦夫氏からの御祝辞



前迎賓館長小林秀明先生は本の細部にまで言及され作品を絶賛された



閉式の挨拶は専任理事の空土久先生

今回の受賞作品は、多くの選者に広く感銘を与えたようです。例えば、奥本先生は「様々な世界の国々や職種が登場し夢がある」と作品を評価され、NHKのプロデューサーである吉川邦夫氏は「映像が目に浮かぶような作品」、前迎賓館長の小林秀明氏は「3回読み直した」と作品の細部に言及されるなど、作品に惚れ込んでおられる御祝辞でした。

出版元の角川春樹社長は、同社角川春樹小説賞の受賞に触れて「珍しく選考委員の北方謙三氏と意見が合った作品」とのコメントに加え、「作家は3作執筆して真の作家」であると最新刊「鬼船の城塞」を「デビュー作を超える作品」と評され、鳴神氏は「正に受賞に値する作家」であるとの御祝辞を述べられました。

多くの方々の熱く心のこもった受賞作品に対する評価は、授賞式の本分ともいえるものであり、式典を大いに盛り上げました。

最後は、当クラブの空土久専任理事による閉式の辞により締め括られました。

なお、副賞の賞金はファミリーマート様、神田明神様から御進呈いただきました。

誠にありがとうございました。

以上